

述べた通り、作者の傾向を心得ていれば、理解は割合容易だったかも知れない。尤も前書きでも述べたように、作者としては検閲への逃げ道を作っておく必要があったろうとは思われる。

それに此の作劇法は、劇場を忽ち支配するかも知れない規格的思考を拒否して、観客の自前の認識をあてにしている。そのために、事件のあらゆるレベルが一つの意味に向って収れんする。そうであれば、作者は観客が皆同じレベルで思考するなどとは始めから予定していなかったであろうし、どのレベルで思考しても同じ意味を持つ断面にぶつかることになっているのである。

ある特定の認識に至らなければ駄目だというような考え方は、シェイクスピアの技法の思想に反する。認識の隠れた齟齬を問題にした作者は、齟齬を乗り越えて生活を円滑にする為の刻々の人間関係における共感・配慮・自省の重要性を訴える。何れ我々が何かの自我の残骸を習慣として引きずり歩かねばならないとすれば、それを責めることではなくて、正直に途惑いを語り合うことだけが意味のある行為であるだろう。シェイクスピアは彼の人物達に最後まで作者の技法を教えないけれども、それは悲劇を残酷に負わせる作為ではなくて、悲劇を消し去る方法だったのである。不信・恐怖・復讐が循環する幻影に過ぎないことを、彼等自身の、そして我々自身の、深い当惑の鏡に映し出すことによって。

(註)

- 1) Edward Dowden, *Shakespeare, a Critical Study of his Mind and Art* (London: 1957), p. 408.
- 2) Hallett Smith, "The Winter's Tale" in G. B. Evans et al ed., *The Riverside Shakespeare* (Boston: 1974), p. 1564.
- 3) G.E. Bentley, *The Profession of Dramatist in Shakespeare's Time* (Princeton U.P.: 1971), Chapter VII "Regulation and Censorship", pp. 145-196, 参照。
- 4) 以下は同じ視点から此れまでに発表した小論文で、全て福岡女子大学文学部紀要「文芸と思想」に載せた。
  - 〈「ハムレット」：悲劇の構造〉
    - 1. 問題点、特に狂気の所在 (34号：1970)
    - 2. 災厄と栄光：形式と信念 (36号：1972)
    - 3. 狂気とプロット (37号：1973)
  - "The Counterfeit Presentment—An Analysis of the Sun-god Imagery in *Hamlet*—" (38号：1974).
  - "A Premise for *Hamlet* Interpretation" (39号：1975).
  - "The Necessary Question of the Play"
    - Chapter I. *King Lear* (40号：1976)
    - Chapter II. *Macbeth* (41号：1977)
    - Chapter III. *Othello* (42号：1978)
  - 〈False Fire: 又は Dumb Show〉 (43号：1979)

って守られ、ボヘミア王によって支えられたハーマイオニの愛の世界が崩れ去るのである。“boy eternal”の世界と共に。

レオンティーズの名誉ある信念が揺ぐ。しかし彼は事態を信念に固執して繕おうとする。不信の上に築かれた割拠的独占的支配権力は、認識の限界が生む不信の幻想を典型的に代表する。秩序を取り戻す努力が、破壊を進める。そして女が家で築くもの、王が一人の男として一人の女とのみ築き得たものが無に帰して行く。しかし息子の死の衝撃が彼に自分が支配者ではないことを思い知らせる。この父性が王妃を救い、後の再会へとつながる。そして不倫の赤子をその場で殺さなかったことを誰も、“one good deed”として賞めなくても、幸い「無数の」善意に恵まれれば、春は自らよみがえるだろう。そして、配偶者を失った淋しい男女同志を、墓石の前で朽ち果てさせる代りに、生命の流れの中に結び合せる時、支配者は彼に託された唯一の“one good deed”を果すだろう。

以上が私の解釈する事件の大筋である。私は病的嫉妬説を批判して始めたけれども、これを「嫉妬」と呼ぼうと「愛」と呼ぼうと、「病的」と考えようと「正気」と見做そうと、この際大したことはないだろう。観る側の私の中の形式的規範の曖昧さこそが映し出されているのだから。

如何にも無細工無器用に紙数ばかりを費したが、私の試みたのは作品を専ら内的照応のみを頼りに読むことであり、照応のヒントとなる私の中の物語りを照応の中で精密化することだった。これは方法論的には完璧な循環論であるが、多分作者の構成の順序を辿ることでもあろうと思う。私は「楽園」とか「バベル」とかの観念を定義なしに用いたが、それはシェイクスピアの極めて人間的な文脈の中でそれらの観念の真の意味が直観的に判ると信じているからであって、外部からの観念系の権威に頼った積りもなければ、推定で物を言わないようにも努めた。そしてこの劇が哲学を持つことに同意される方々は、その哲学が形而上学的な観念体系の批判をなすものであり、観念の背後の真実を啓示するものであることも判って頂けよう。

この作者の以上分析してみた技法は、もともと「ハムレット」について気付いたものであって、小論はそれを「冬の物語り」に単純に適用したまでである<sup>4)</sup>。単純にと言っても、重い内容のある思想を適用するのはやり甲斐のあることだったし、土台一人で出来ることではない。私の程度の英語力では、私の経験に基いて上述の技法の舞台劇としての妥当性を考える手掛りにはとてもならない。こんな説明を要するとすれば失敗作だろうし、説明を要さないとすれば、随分と醒めた思考を直観的に行う観客を想定することになる。しかし今も

絶対の真実に直面していたから。妻を所有する既得権など存在しないことを直覚したから。その真実が怖かった。個体の此の原初的な孤独を認める勇気が無かったばかりに、彼は、この孤独の不安を人は愛に変えるのだということ、その“grace”と呼ぶ他ない喜び、求愛の成就の折に彼を包み今も胸に抱いている喜び、を自ら投げ捨てる。愛を、衝動“tremor”のレベルを越えて、互いに生き延びようとする二人の協力として理解できなかった。妻の行為を衝動で解釈したのは、シシリア王自身がそのレベルに居たからである。

As in a looking-glass. (117)

鏡があったのだ。怖ろしく正確な鏡。そして眼があった。望まないものを見る眼。恋愛を儀礼化する慣わしと、恋愛と儀礼を区別する心と。

This entertainment

May a free face put on, derive a liberty  
From heartiness, from bounty, fertile bosom,  
And well become the agent: 't may, I grant;  
But to be paddling palms .... (111-115)

この鏡は、位階秩序によって疎外され罪悪化された性の欲求を、宮廷生活が、自らの支配権力から暫く免れた密室で、不毛な女性崇拜の儀式によって処理した歴史を映す。その虚偽とその真実とを。紳士シシリア王は、真実を実演したが、虚偽を疑うことを封じられていたのである。彼は彼の権利を侵す者を疑うことしか出来ず、しかもその疑いと不安をひそかな恥の闇の中で現像しなくてはならなかった。だから、真実への不信が循環したのだ。自分の真実を不信に値する姿に変えてしまったのだ。

“gallant”な規範は夫婦生活の尺度では無い。だが、不毛な恋愛の虚偽を虚偽と知らずに訓練された正直な精神は、この曖昧さを習慣によって飛び越える。レオンティーズが恋に燃えていた時も此の紳士の規範に従っていた。ポリクセニーズが友人の妻と談笑する時も同じ規範に従っている。華かな宮廷の社交規範がボヘミア王の“fears”を隠し、同時にレオンティーズの“fears”の表現を封じる。同じ形式を守る者の中に、その形式によって隠されて、共通の生の不安がある。錯覚の背後には共通の人間性がある。今、慣わしの異常さが、異常さを見付ける人間の異常さという姿で露呈する。こうしてシシリア王によ

けによって、全ての有為転変に翻弄される自分を承認していることは出来ない。彼は努力が他人に認められるのを求め、彼にとっての good が他人との関係でも good だと信じようとする。知的自我が彼の “nutshell” (*Hamlet*. 2.2. 260) を遠く越えて拡がる。この時、拡がり合った自我同志の信頼の欲求が、バベルの挫折を体験する。しかし “opposed winds” に吹かれるままに世界の隅々に散らばることは出来ない。“vast” を越えて慕い寄る欲求が、それを妨げるものへの激しい反応となる。

I have a tremor cordis on me: my heart dances;  
But not for joy, not joy. (110-111)

愛し合う者が他者同志だという真実の前に立たされた魂がここにある。そこで彼が身内に出会うのは、tremor cordis としか呼びようの無いもの、joy に伴い、今明らかに joy で無いものにも同じく伴っている、主観の幸不幸に先立って彼を動かす原動力なのである。だから錯覚は常に真実を含む。

To mingle friendship far is mingling bloods. (109)

これは永遠の真実である。友情とは血を交えなくては収まらないものなのだ。友情のけじめを忘れるのは、愛欲が血を交える一つの方法に過ぎないことを忘れるからである。この統一的認識の欠如、従ってまたこの具体的区別の自覚の欠如が、レオンティーズに両者を混同させる。混同に先立って、友情と性愛に表現される彼自身の激しい欲求の性格についての誤解又は無自覚がある。

しかしバベルの呪いなどありはしないのだ。彼は只自ら傍白の世界に引きこもる。若し彼が疑を口に出して事実を確かめることが出来る程に自分を信じていたならば、若し自分の認識を語って他人の認識を知ろうとする程他人を信じていたならば、この場合誤解は一場の笑い話で終り得たであろうし、誤解を生むような自他の思考や行動の慣わしの奇妙さに気付くことも修正することも或いは出来ただろう。破壊が人に謬ちを気付かせる前に、単純卒直な方法をレオンティーズが取らなかったのは何故か？ 黙って自分の所有だと確信できる息子のところへ退行したのは、申し開きようの無い不信行為ではなかったか？

レオンティーズが疑惑の中に自分を閉じた理由は “not for joy, not joy” に明らかである。joy でなければ何だったか？ 彼はそれを自分に明らかにすることをためらう。彼はおじけた。何故なら妻の心変りが事実であり得るという

Our praises are our wages: you may ride's  
With one soft kiss a thousand furlongs ere  
With spur we heat an acre. (94-96)

ここで“soft kiss”の持つ最高の力が説得力をもって主張されているのは明らかであろう。しかし、問題は“a thousand furlongs”も“an acre”も“kiss”や“spur”では耕せないということだ。これはそういうもので他人を動かせば済む人間の農業についての軽やかな知識を反映する。丁度、“gaoler”の“fees”が“without thanks”に支払われ得るように。ここで王妃自身は“gaoler”の場合と同じく、労を取ろうとする意思を示しているのであり、自分を働く人間にぎしているのだ。しかし彼女は“wages”の苦労も、喜びも知りはしない。「黙々と」耕作する人々——いや“spur”される馬と言おうか？——のイメージがここにあり、それに見合う生産の事実が国にあっても、人はその最高の善の資質を以てしても彼の生活条件に閉されてしか見ないのである。そのような生活意識の共感が欠けている間柄で、若し“one soft kiss”が役立つとすれば、その背後に“spur”が控えているからに他ならないではないか。だがこれはspurを他人にあてた事の無い王妃に帰しても仕方の無い責めである。

ではspurに勝るkissのイメージの説得性はどこから来るのだろうか？ それは、この場について度々用いて来た楽園というイメージに準じれば、「エデンの東」という「額に汗して働く」ことを命じられた世界のイメージで説明される。我々の眼前の問題は結局、楽園を迫われた者が楽園に寄せる涯しない夢についてのものなのだ。ここで“spur”は現実生活の条件となり、“soft kiss”はその苦痛をやわらげる原理となる。ハーマイオニの言葉は、現実生活の苦しい条件を“spur”を以て切り抜けようとするところこそ“hereditary”な現実を無視した“ill-doing”であるのを暗示するのである。ここに、女が子を産み男が耕す宿命が苦痛に傾くか喜びに傾くかが問われる。我々は今、耕さないで所有し支配する男達の人間性が、彼等の作った人工の楽園に満足し安息し得るかを確かめつつあるのである。

#### (九)

こうして我々は、人間は“good deed”以外のことをしたことは無く、する筈もない、というシェイクスピア的ビジョンの核心に近付く。エデンの東に生み落された者は、その宿命通り精一杯生きており、精一杯生きているという自負がある。幸か不幸か、人は自分の自負だけでは満足しない。個体の存在感だ

まれる王妃の “He'll stay.” は余りに全てを単純化するのであり、そのため

There is no tongue that moves, none, none i' the world,  
So soon as yours could win me.

で表現された相互の至高性を信じるレオンテーズに衝撃を与える。

この衝撃は、状況を彼自身の一方的な欲求に照して見る心理によって、嬉しさとなり、それをもたらしした妻への賞め言葉となるが、ここで彼は実は彼の主張を引き継いだ王妃の表現力を賞めているだけであって、ハーマイオニが彼に対して彼女の意思でなした献身に感謝しているわけではない。しかし、このことは王妃が専ら夫の願いをかなえようと努めた事実と表裏しているのである。

すでに述べた経過によってハーマイオニは “praises” を要求することになるが、

one good deed dying tongueless

Slaughters a thousand waiting upon that. (92-93)

は、相互の好意の評価の持つ絶対とも言うべき重要さの指摘を含む。先ず賞讃の要求は女が子供をあやす母親の役ばかりはしておけないのを示し、女をある小空間に閉じこめておいてその優しさの恩恵を特権的に所有しようとする文化の小児性を暗示するが、この含意は更に拡大されて、人間集団の連帯性に適用可能となる。すなわち、人間が互に相手の努力に感謝し合う事を怠れば、その時点で流れが断たれるのである。これは皮肉にも今ハーマイオニがおかしている “tongueless” な忘恩行為が来るべき混乱を招くのを予示している。何故なら、レオンテーズの願いがかなったのは、最も直接的には、ポリクセニーズが王妃の無理を好意を以て聞き入れたからだだったのだから。彼女は彼の好意を夫に語るべきだったのだ。たとえ王妃には彼女の強いた無理が言葉のゲームであったとしても、王妃自身の論理は彼女の盲目を忘恩と定義してしまうのだ。従って、王妃の知らぬところで行われている “tongueless” な “good deed” は、王妃の “praise” の論理に修正を迫る性質のものである。それは死なないで、王妃の満足と、レオンテーズの喜びをもたらしした。好意は沈黙して働くのであり、人に必要なのはそのことへの信頼なのである。従ってシシリア王の不信は、彼が何より先ず信じ得ていなかったことを証明する。疑い出せばきりが無いという事実は、一つの光景そのものはどこまでも “tongueless” だということなのである。

それはハーマイオニの “Grace to boot” によって直観的に批評されているのであるが、女性の此の愛を “my wife” として無条件に所有する意識そのものが offence をなすことは疑いなく、ここに「略奪品」という “boot” の意味が浮び上ると共に、その背後の暴力的支配を暗示せずにはおかないのである。

しかし又、全体として見れば、ボヘミア王の歪んだ観念構造がこのようにハーマイオニの真実に反するにもかかわらず、彼女の側には只誠実さと信頼があるだけであって、結果的に生命の罪惡視という罪惡の共犯者となっているのである。こうして、“pretty lordings” への視線と、“we’ll answer” の意識とは女性的な性又は生命の現実感覚によって統一されているに対して、彼女が見守ろうとする世界は幼年から成人への過程において the sun と innocence から sin と fault に変化し、女はそこに巻き込まれているのである。自分が “most sacred lady” と呼ばれることを無条件に承認する限り、彼女は、男達の罪に “answer” 出来ないだけでなく、そう呼ばれることで自分が男達に罪を許していることに気付かないし、当然その罪を自覚する筈も無い。すなわち、彼女が女性であることが男の身勝手の言い訳になるとは思っても見ないのである。しかしボヘミア王が彼女のみが用い得るレトリックに順応して彼の “fears” を無視したのは、言い換えれば、“fears” を私的な事件と見做したことであり、それを公的社会的責任へと発展させることによって、シシリア宮廷の宴の呪縛を解く方向に進み得なかったことなのだ。かくして彼等は、生命から生き甲斐を奪う無責任無自覚の “prisoner” なのであり、それは子を愛し夫を愛する女の存在の樂園的胎内の快さの感覚及び、それを社交の小世界の中に保護しておく心遣いではどうにもならないのである。以上のような宮廷の精神状況を女主人と客人との親しい語らいの中に織り込んで見せてから、作者はレオンティーズに客が帰国を延ばしたことを伝えるのである。

(八)

*Leon.* Is he won yet?

*Her.* He’ll stay, my lord.

*Leon.* At my request he would not. (86-87)

“won” と “request” の対照が先ず目を惹く。少くとも説得を引き受けた時ハーマイオニは、夫が “Charge him too coldly” だと批判したのだった。だが彼の対立的な表現にかかわらず、彼にはそれは “request” だったのであり友人を引き止めるのは無理だという感覚が “won” に表現される。その間に差しはさ

のを意味している。このことはすでにボヘミア王がハーマイオニの説得に応じた経緯に明らかだったことである。すなわち、女性が男性に対して持つ自然な魅力は、その魅力の権威を否定する支配的権威の影においてのみ、非自然化され美化され作り上げられた表現を得るのである。

その最も危険な結果として、女性への関心は、生活の諸々の条件の支配下に置かれる代りに、未だ男性の側の性的関心であるという様相を保ったまま規範化された表現をとることになる。「女が男より強い」という言葉が事態を解決出来るのは、女の性的魅力を尺度とする習慣があるからである。

そこで女の方が、男性の世界の闘争用語を逆用して男を口先で振り回しているようにさえ見えることになる。しかしハーマイオニの次の言葉はその可能性を否定する。

Grace to boot!

Of this make no conslusion, lest you say  
Your queen and I are devils: yet go on;  
The offences we have made you do we'll answer,  
If you first sinn'd with us and that with us  
You did continue fault and that you slipp'd not  
With any but us. (80-86)

ここでハーマイオニもまた“my most sacred lady”と呼ばれることを無条件に受け容れた上で、ボヘミア王の論理の中で彼女にとって自明ではない部分を問題にしている。“temptation”説は、女を“devil”視するものだと云う正確な指摘は、彼女自身自分が devil 視されていないことを信じているから、言葉の問題として、単に表現の問題として扱われる。その場合でさえも彼女は、この無体な汚名の着せ方の勝手さを逆手にとって男こそ誘惑者であるという主張をしようとはしない。逆に彼女は、着せられた勝手な汚名を着たままでも、愛し合い信じ合うことは出来るという能力を示す。これは形式的には、ボヘミア王の論理が含んでいた不道德な居直りに対応する共犯者の居直りであるけれども、それは、相手の前提を承認した結果なのであって、ハーマイオニの友愛の論理の中でボヘミア王の対立の論理が無視したものが回復され修正される。すなわち、“you”と“we”との形式的対立は、三度“with us”が繰り返される中で一体化され、告発者が被告発者によって承認され抱きとられて、告発する者の“offences”が見えて来る。



れは紳士の慣わしであるけれども、演技されているわけではない。今成立している人間関係の中でボヘミア王の用語法の矛盾——性を“ill-doing”と呼び、女を“sacred”と呼ぶ矛盾——は全く本人に気付かれてはいない。

しかし一人の女を“sacred”と呼ぶのは本来奇妙なことなのだ。その奇妙さが全く奇妙なものと意識されない語法の習慣があるということが本来奇妙なことなのだ。しかしそれは、“my wife”と“your precious self”との間の際立った対照によって、そして、この対照的な言葉によって描き出されるボヘミア王の女への強い関心によって、説明されているのである。

幼年の“innocence”からの墮落という意識は、性で占められている。それは“temptations”の強さを説明すると共に、何故それが“temptations”でしかないかをも説明する。ボヘミア王にとって恋愛と結婚は何よりも先ず私的な欲望の問題なのである。それは何かの要請に“answer”するものでは無いゆえに、他人に対して価値を主張出来ないものなのだ。この事情があって始めて、原罪説が威力を振うのである。

墮落した成人の世界を語る時の意識が性によって占められることの当否は兎も角として、それがボヘミア王にとって極めて重要な因子であること、いや不可欠な因子であることは、その“doctrine of ill-doing”と際立った対照をなす前述の居直りに明示されているが、更に“my wife”の持つ疑いを許さない現実感覚に表現される。

にもかかわらず、“my wife”は、“doctrine of ill-doing”に支配される彼の観念世界の中では、その観念の支配性を支える役目を負うに過ぎない。つまり、性は私的な欲望の問題であると同時に、結婚も私生活に過ぎないものと認識されているのである。言い換えれば、結婚における男女関係の部分を蔑視する支配的価値体系が存在するのである。

この価値体系が“my wife”と“your precious self”の対照を作り出す。“wife”がボヘミア王の観念規範の中に何の権威も持たない時に、彼の妻は他の男達から“my most sacred lady”“your precious self”と呼ばれているに相違ない。彼女がそう呼ばれるのは女であるからと同時に王妃だからであり、女が“wife”という地味な隠れた世界で果している仕事の権威を認めない価値基準によって、夫である支配者の神聖さに準じてそう呼ばれるのである。

しかし、如何なる矛盾にもかかわらず女性が男の関心の核心的な対象であることは、たとえここでそれが否定的な様相を観念的には示していようと、はっきりにしている。従って、“my wife”と“my most sacred lady”との相違は、支配的価値体系が、この否定すべからざる因子に対して二重操作を行っている

又、原罪説の断片でこの生活の信頼を形而上学的な不信に変えてしまう程稀薄に生きてはいないのである。

By this we gather  
You have tripp'd since. (1. 2. 75-76)

生きることが罪だというに似た論理を直観的に納得しないハーマイオニは、ボヘミア王の言葉を過去の個人的な過失への言及と理解する。だが“have tripp'd since”は「以来今まで過つて来た」を我々に対しては含意するだろう。ハーマイオニに対するボヘミア王の返答の不条理は驚くべきものがある。

O my most sacred lady!  
Temptations have since then been born to's; for  
In those unfledged days was my wife a girl;  
Your precious self had then not cross'd the eyes  
Of my young play-fellow. (76-79)

彼自身の結婚の事実は、彼の側にとっては有無を言わさぬ強制的事態であり、彼自身は道徳的選択の自由も責任も無いという前提で、彼は“temptations”について語っているに過ぎない。すなわち、誘惑される自分の責任を問わないで、結果が“ill-doing”であるから原因は“temptations”だという循環論をしているに過ぎない。ここでは何よりも自分の主体性が完全に忘失されている点が重要である。しかし彼自身の原罪説に照せば、これは厚かましい居直りであって、今や“innocence”は“unfledged”へと変化している。

この文脈で重要なのは、“since then”, “born”, “unfledged”, “a girl”, “young play-fellow”にあらわれる成長の経過であり、性的衝動が誕生と同じ出来事だという暗示である。特に“play-fellow”は未だ価値ある仕事をしない準備期間を意味するのであり、ボヘミア王の言葉は“innocence”の賞讃から変質している。

しかし何よりも驚くべきは、“the doctrine of ill-doing”が性の“temptations”を意味することを説明する言葉が、“most sacred lady”で始まることなのである。ポリクセニーズはここで王妃を幼年を回想してなっかしむ彼自身の対話の相手として、つまり“the doctrine of ill-doing”に対立する精神に属するものとして扱っている。意識的にではなく、会話の自然な流れの中で、その自然な流れの中で極く自然な友情と尊敬を込めて“my sacred lady”は言われる。そ

ここでは、人間の生活を罪惡視するという“ill-doing”に手を貸す“doctrine”なのである。生命が持ち得る充足感に比べて生命を非難するという非論理なのである。それは生命からその本来の喜びを奪うものを生命の絶対の姿だと錯覚しているに過ぎない。しかしこの錯覚は絶対的な圧力の下でのみ可能な筈である。

“hereditary ours”には、性的な生命の伝承と、その伝承を利用して伝えられる文化伝統とが混同されている。ここで我々は一幕一場の末尾で王と王子が社会体制にとって単なる機能であることを発見したのを思い出す。この文化集団が充足感の欠けた生活を強いられ、臣下達が夢を王家や王子への幻想に託している時、王は彼の夢を一体どこに託すのだろうか？

they have seemed to be together, though  
absent, shook hands, as over a vast, and  
embraced, as it were, from the end of  
opposed winds. (1.1. 31-34)

“absent” “vast” は空白・虚無・無意味そのものだ。幼年時代友情を続けたというだけで離れても“together”に“shook hand”する能力を持つ者同志が、“stronger”で“higher”な肉体的条件によって割り当てられた“magnificent”で“gallant”な“royal presence”の中に何等“embrace”すべきものを持たないのだ。

there rooted betwixt them then such  
an affection, which cannot choose but  
branch now. (1.1.25-27)

“branch”の二重の意味は明らかである。愛情は成長し拡がり、対象は一人の少年から多数の男女へと拡がる。だがここではそれは二つの王家の、従って二つの体制の、対立的存在の反映なのだ。そこで成長した少年に求められるのは只“stronger”で“higher”であることなのだ。能力は何より先ず武力と支配力なのである。

幼時の友情をなつかしむ余りに、ポリクセニーズはふと生活の非充足感をかいまみせ、人生そのものへの否定的な感覚さえあらわすのだが、ハーマイオニは彼の感覚を理解しない。成長した現在の王達との現在の交際から彼等の少年時代へと遡る王妃には、愛する夫や愛する客人を否定的に眺める視点は無い。

*Pol.* We were as twinn'd lambs that did frisk i' the sun,  
And bleat the one at the other: what we changed  
Was innocence for innocence; we knew not  
The doctrine of ill-doing, nor dream'd  
That any did. (65-71)

少年が母にとっていたずらっ子でしかない時に、少年はもう母子関係を離れた人間関係を作る。本来ならそれが母の見守る子の成長そのものであるだろう。だが奇妙にも少年は成長を拒否する。彼の魂は“boy eternal”のままなのだ。それは生命の性的構造を拒否し、性を悪と呼び、男同志の友愛のみを“innocence”と呼ぶのである。

「今日のような明日が来るとばかり考えていた」少年は、先ず、「過去によって今日の安心は確保されている」と言う女に似ている。だが、女は生活を見ずに成長を見ているのであり、男は成長を見ずに変化だけに注目している。成長の感覚が無ければ、成熟とは異様な変態でしかない。

Had we pursued that life,  
And our weak spirit ne'er been higher rear'd  
With stronger blood, we should have answer'd heaven  
Boldly 'not guilty;' the imposition clear'd  
Hereditary ours. (70-75)

少年は確実に成長し、“higher”, “stronger” と価値を増しているのである。だからここには只事ではない倒錯がある。確かに原罪説が一枚かんでいるにしても、成長して来た人間自身の真の自己解放が幼時の友情にのみあったという体験が語られているのも事実なのだ。従ってボヘミア王の幼年期への情熱的な執着は、単に個人的な小児性の問題ではなくて、成年期以後の彼の充足感を拒んで来たものへの反作用として理解されなくてはならない。“higher”, “stronger” が幼年期の深い絆に似たものを全く作り出さなかったことは明白なのである。

従って“hereditary ours”は、この充実感を欠いた生活が成年への成長によって強いられる事実を反映して、成長の事実そのものの価値を否定しようとしているのである。そこに、幼年期を通過しなければ成人にならないという明白な事実にもかかわらず、人間生活全体を罪に属するものと見做し、幼児期を神聖なものとして成長の枠から外して祭り上げる必要があるのだ。原罪説は、こ

士の美德だという規範があり、その規範に従うだけの時間の余裕があったからなのだ。

しかし、両者の食い違う意識は、政治的公的関心を排除する点で一致したのであり、ここに女の主権という観念と女への思いやりという規範とがもともと同じ根のものである証拠がある。女性の前で“gallant”な紳士として美事に行動することによって、ボヘミア王は彼の貴婦人に対する行動規範が彼の公的責任とは全く絶縁された無責任なものであることを暴露する。すでに述べたように、これがレオンティーズの不審を招くのである。がこの時点では、兎に角、楽園に忍び込んだ“fears”は暫く駆逐されたかに見えたのだ。

(七)

ポリクセニーズは滞在延長を承知した。レオンティーズの願いがかなったのだ。しかし、これを彼に伝える前に、作者は“gallant”な主権者ボヘミア王の観念世界について、鮮明な情報を、かなり思い切った手法で与えてくれる。これは当然シシリア王の観念世界でもあるから、やがて起る錯覚事件の社会的歴史的心理的背景として準備されているのである。

*Her.* Not your gaoler, then,  
But your kind hostess. Come, I'll question you  
Of my lord's tricks and yours when you were boys:  
You were pretty lordings then?

*Pol.* We were, fair queen,  
Two lads that thought there was no more be-hind  
But such a day to-morrow as to-day,  
And to be boy eternal. (59-65)

“tricks” “lordings” はハーマイオニが“hostess”であると同時に母性であることを示す。男達は、少年の成長を見守る母の眼で眺められる。成人の価値基準を明確にしつつ、たわむれる子供を慈む視点からは、ポリクセニーズの答は時間も世界も知らなかった幼時の幻想の追憶とのみ聞えるであろう。しかしボヘミア王は全くそんな積りではなかったのだ。

*Her.* Was not my lord  
The verier wag o' the two?

と、命じているのである。元来征服者の言辭である “prisoner” か “guest” かという二者択一の脅迫は、ここでは美事に逆転した結果、征服者の場合と同じく、“guest” になることは “prisoner” になることと同じことになっている。

*Her.* My prisoner? or my guest? by your dread ‘Verily’,  
One of them you shall be.

*Pol.* Your guest, then, madam.

(55-56)

こうして明らかにボヘミア王は “guest” であることを択ぶことで、ハーマイオニのレトリックの “prisoner” となる。王妃にとってそれが客としての当然であるとしても、“dread ‘Verily’” を表明した王の側には何が起っていたのか？ 少なくとも、女主人が主権を主張した結果、王妃のレトリックに従うか、そのレトリックの空しさを指摘する結果になるか、という危機的選択がボヘミア王の側に残った。王妃の馬鹿々々しいレトリックがそのまま通じたかのような結果になったのはどうしてだったか？

To be your prisoner should import offending;  
Which is for me less easy to commit  
Than you to punish. (57-59)

これは支配者に対する被支配者の心掛けであって、反抗すれば罰せられるのは当然であるが、反抗など考えることの方が難かしいと言うのである。すなわち、先程から使っているヒュに従えば、ボヘミア王は完全な “prisoner” として立ち現われる。ここで重要なのは、最早ポリクセニーズは、女主人の主権宣言が彼の意志に対立していた状況でのあのレトリックに不承不承従っているのではなくて、そのレトリックが由来した世界に入ることによってそれを真実のものとしたということなのである。それが主体性を確保する方法だった。すなわち、彼は支配されるように見えることによって状況を自分の手に掌握した。

ハーマイオニの用いた言葉の芸がそのまま単純に事態を動かしたのではないのである。「prisoner になるか guest になるか。」という言語表現の片側には王妃の意識があり、反対側にはボヘミア王の意識があり、両者はもともと食い違っていた。話が円滑に流れたのは、ハーマイオニが、女の主権の主張によって接待役の好意を示した時、ボヘミア王の方には女に思いやりを示すことが紳

彼女が他人に頭を下げる必要の無い階級に属しているからである。彼女は皇帝の娘に生れて、国王の妻となった。しかし此の生れのおかげで生活のすみずみに権威への怖れを持ち込むという不幸な必要を免れたことが、家庭的な社交世界の女主人として宴と好意の精神を徹底的に主張できる理由なのである。王権によって支配されて営まれる生計・生産に無縁の彼女だったから、王権を怖れる必要の無い王女だったから、彼女が主人である世界の主権を宣言出来る。従ってまた彼女の経験した“vows”は彼女が拒否すれば屈服するていのものだった。“as potent as a lord’s”は、女の権威が男のその影であることを暗示し、ハーマイオニの絶大な自信が、父と夫との強大な武力の影であることを暗示する。

しかし勿論それだけでは、ハーマイオニが“as potent as a lord’s”によって「男よりも強い」ことを意味し得た説明にはならない。彼女は明らかに、男の武力的支配権のイメージを介在させることなく、女主人の支配権を信じているのである。そしてここにこそこの文化のレトリックがある。女の支配する空間は男によって承認され保護され維持され利用されているのである。影ではなく、まさに男の意志なのである。だからハーマイオニの次の言葉は深いアイロニーを帯びる。

Force me to keep you as a prisoner,  
Not like a guest; so you shall pay your fees  
When you depart, and save your thanks. (52-54)

若しボヘミア王が屈服するとすれば、彼は自分の意志の“prisoner”として、男によってある小空間に閉じこめられた“prisoner”である女に、その小空間の約束に従って“lady”を演じさせることになるのだ。そしてその約束とは何よりも先ず男の都合に属していた筈なのである。

それを夢想もしない王妃は、支配権力についての甘い認識を、“gaoler”と“fees”についての誤解に示す。“fees”とは、“prisoner”を苦しめる苛酷な支配権に自ら奉仕しながら、その立場を利用して苛酷な苦痛を幾分でも軽くしてやろうとする看守へのささやかな返礼なのであり、支配権の下ではそれは無言の儀礼なのである。後にポーライナは看守の人間性を支配者その人に通じさせることによって窮地に追い込むことになる。だが今ハーマイオニは暴君であると同時に親切な看守であろうと言うのである。客を“prisoner”として引き止めるような破目にならないように“guest”となることを自分から承知して呉れ

*Her.* You'll stay?

*Pol.* No, madam.

*Her.* Nay, but you will?

*Pol.* I may not, verily.

ハーマイオニの “Nay, but you will?” は形は拒否でも内心は承諾するという二重意識を暗示しつつ、強引に承諾させて了おうとする、また、承諾するに決っていると信じている口調である。子供の没論理の可愛さを感じるけれども、ここで大事なのはやはり、その没論理が成人の生活に持ち込まれていることである。可愛い女の世界とそれを成立させている世界の二重構造があって始めて、ハーマイオニが単に客の遠慮を解きほぐすような積りで示す誘惑の演技を自ら信じ込んでいられるのである。

ポリクセニーズの ‘verily’ は王妃が “oaths from him not to stay” (29) を事実上引き出してしまったのを意味している。それは当然だったし、シシリア王夫妻はここで引くべきだった。だがハーマイオニは驚くべき単純なレトリックでゲームを逆転するのである。それはまさしくゲームであり、善意のゲームであったから、ハーマイオニに罪の意識は無かった。

(六)

Verily!

You put me off with limber vows; but I,

Though you would seek to unsphere the stars with oaths,

Should yet say ‘Sir, no going.’ Verily,

You shall not go: a lady’s ‘Verily’ ’s

As potent as a lord’s. Will you go yet? (46-51)

これらの言葉はゲームとしてでなければ使えないものである。しかしまたゲームの為に借りられた闘争世界の本当の怖ろしさの自覚があるなら使えないものである。“limber vows” という表現は、vows 自体を言葉だけの世界で認識しているから可能なのであって、oaths に “unsphere stars” する力があるのは背後の物理的な武力を前提しているからである。では社交の世界では oaths は一切の暴力性を捨てるか、と言え、勿論そんなことは無くて、下位の者は常に上位の者の気嫌を損じないよう気を配らなくては危い。ハーマイオニが一国の王に面と向って “limber vows” とたわむれにせよ嘲ることが出来るのは



When at Bohemia

You take my lord, I'll give him my commission  
To let him there a month behind the gest  
Prefix'd for's parting. (39-42)

“a month” という “gest” の限定という微笑ましい没論理を省いて見れば、王妃は、夫達の行動を追認することで愛を示すしかない女達、それでも夫達に帰宅の時間を約束させることによって自分の影響力を信じている女達を代表しているのである。しかし今、ボヘミア王妃の意向にかかわり無く男達の友好を引き延ばす仕事を託された王妃は、彼女のその関与を “a month” という具体的意志に置き換えざるを得なくなる。男の側に立った女の従順という背理的状況は流石にもともとの女の愛とはかけ違うので、ハーマイオニは次のように言い添えるのである。

yet, good deed, Leontes,  
I love thee not a jar o'the clock behind  
What lady-she her lord. (42-44)

家で夫の帰りに首を長くするのも、遅くなる夫を信じ続けるのも “good deed” に違いない。しかし、どの妻の夫を想う心にも負けないという競争的な表現で自分を弁護する必要に迫られながらハーマイオニは、彼女自身の愛についての此の言い添えが、当然先程同じ従順の美德を持つ筈だと想定したボヘミア王妃についての言い添えに他ならないことに気付いていない。言い換えれば、彼女の行動全体は同じ女への裏切りをなすのである。自己弁護する必要があるのも、裏切りになるのも、もとは、男の世界の論理が女の世界に全く接していないからなのであって、ここには専ら女の側からの愛が語られているのだ。

すでに述べたように、政治的な懸念によって帰国を迫られている人間に対して、ハーマイオニの言葉は全く筋違いの世界に属している。しかも若しハーマイオニが逆用しようとする通り、男の規範がボヘミア王の家族への情念の表現を妨げているとすれば、王妃はこのような話題を出すことによって、残酷に無意味に相手の帰心をかき立てているだけなのである。だから、以上のような説得が、一見帰国の明確な意志を表明したに “royal presence” に通じる筈はなかったのだ。

一部でもあるからには、彼は彼が最も主張すべき論点を見失うだろうという意味である。

次にハーマイオニは女らしい機智によってボヘミア王の退路を封ずる策に出る。

To tell, he longs to see his son, were strong:  
But let him say so then, and let him go;  
But let him swear so, and he shall not stay,  
We'll thwack him hence with distaffs.  
Yet of your royal presence I'll adventure  
The borrow of a week. (14-39)

息子に会いたいと言うなら帰すと言うのである。しかし “let him go”, “shall not stay”, “thwack him” が示すように、息子に会いたいなど口に出す男は軽蔑されて追い出されるのである。“your royal presence”は、口が裂けてもそんな事は言わないのである。

しかし息子のことを持ち出したのは、ボヘミア王が息子に会いたいだろうという共感がハーマイオニにあるからであって、これが女らしいところであるが、しかし、この共感を、それを拒否するために用いたのは、この引き止め工作自体がハーマイオニの人間性に照して不公正なものであるのを物語る。

更にもう一つ注目すべき点は、ハーマイオニの此の関心の世界は、ボヘミア王の説得には全く筋違いだということであって、彼女が逆用した積りの男の規範は、本来女子供の世界への軽蔑なのであるから、王妃は王妃自身の自然な関心のありように対する軽蔑を武器に用いているのである。このことは “your royal presence” の “royal” が全く公的職責という内容を欠いた私的な尊称であることを示す。そして「お借りする」というのがボヘミア王妃からであると判ると、我々は、そこに投影された “royal husband” (107) に対する王妃自身の認識について流石に驚きを禁じ得ないのである。

これを責任感の無さとして彼女の個人的欠陥に帰す前に、我々は、一幕一場における従臣達の展望の中に女が一切姿を見せなかったこと、王の後継者の誕生の話題にも王妃は何の役も果していなかったことを思い出さなくてはならない。すなわち、王妃の認識は男性支配世界へのアンチテーゼではなくて、世界の公的政治的営為からは全く独立し全く切り離された生活にのみ属しているのである。

年の“affection”は今再び支配の“necessity”との原理的対立を来していたのだが、“affection”がレオンティーズの小児的な無自覚によって背徳性を孕んで王妃に伝えられた時、このよしない未練は、支配の“necessity”から切り離された社交場で夫のために尽す女によって、姿を変えて最初の純粹さを取り戻す。彼女の影響力が及び得た“for some while” (108) において、ボヘミア王の“fears”は否定されたのである。

ハーマイオニはこう始める。

I had thought, sir, to have held my peace until  
You had drawn oaths from him not to stay.  
You, sir,  
Charge him too coldly. (27-30)

この批評は直観的に正しい。男達の自己主張の仕方では論理的に言って冷い喧嘩別れになったろう。しかし、実際にはシシリア王は困って妻に助けを求めた。喧嘩になったら介入しようと思っていたというのは、“oaths”の怖ろしさを知らないのである。男達が争い出したら王妃の peace も speech も無意味なのである。

そして結局、本格的に争わるべき“necessity”の問題に対して、ハーマイオニの言葉にどんな効力がある筈もなかったのだ。

Tell him, you are sure  
All in Bohemia's well; this satisfaction  
The by-gone day proclaim'd: say this to him,  
He's beat from his best ward, (30-34)

9ヶ月家を空けたのがもとで懸念し出している人間に向って、これはまた悠然たる議論である。“this satisfaction”はシシリア王妃のものであって、ボヘミア王のものでは無い。昨日と今日と明日が自動的に同じだろうと安心していられるのは、何の心配もなく暮しているからである。しかし一方で此の安息はボヘミア王のものでもあるので“beat from his best ward”は面白い三つの意味を持つことになる。一つは当然、ハーマイオニの主張は全く見当外れだという意味である。一つは、これ程判ってくれない相手にはボヘミア王も手のほどこしようが無いという意味である。そして一つは、この見当外れがボヘミア王の

う中で自然に別れの日に近いながらも良かったのだ。シシリア王も、ひたすら未練を表現する代りに、大切な身体を長く引き留め過ぎたと詫びて好意を示すことも出来ただろう。だが支配権の主題が国民の総合的生産力でありその保護であることを理解しない特権所有者達は、所有する者の安楽と所有に執する者の猜疑の両極間を振れ動くことが出来るだけである。偶々本拠に居ない王が不安の発作におそわれ本拠に居る王は快楽を信じ続ける。しかしそれは両者に共通の両極的分裂の結果であったから、互いの要求を否定し合うという困惑すべき事態を招いてしまう。

9ヶ月に7日を足すかどうかは本来大した問題ではなかった。ボヘミア王自身がやがてそれを証明する。しかし、この対立に含まれていたのは、時間や世界の分割と所有の問題だけではなくて、ボヘミア王が果してボヘミアに属するのか、レオンティーズと作る楽園に属するのか、という困難な、価値上の問題だった。ポリクセニーズが私的な意志の表現ながら、帰国を言い張ったのは、王家への帰属の主張がかかっていたからである。そして後に彼が意思を翻したのは、この主張の真の意味を知らなかったからであり、そのような意味が問題にならない空気の中でであった。又、レオンティーズが引き止めたのは同じく私的な表現であったが、愛の絶対性の主張がかかっていたからであり、その真の意味に気付いていないからである。

王達の心中の整理の悪さは、彼等に許された生活の甘さの結果だが、その甘さは命令によって全てを自由に出来るというに由来する。今、王達がふと来した対立が抜き差しならないものになるのは、互いに主張を通そうとしないからである。ここには屈服はおろか、互いの論理をつき合せての対話が無い。「それでは二つに割ろう」というレオンティーズの提案は、どこまでも彼の提案であって、相手の“necessity”の考慮ではない。奪い合い、争い、所有を主張し合う慣わしに属する言葉は、友愛が争いを封じているために、当惑を生んだ。一旦言い出した事を撤回する習慣もなく、未練を友情にもとるものと批評する確固たる自覚も無く、友人を無理に引き止められないと知りながら、友人の翻意を期待して、レオンティーズは彼の未練をハーマイオニに委ねたのである。これは本質論からすれば、男らしくない身勝手な行為だった。しかし自分の身勝手さに全く気付かないという条件の下では、宴の女主人であるパートナーへの極く自然な協力の要請だった。

ハーマイオニもまた、夫の身勝手さに全く気付かないという条件の下で、夫の願望を手渡される。それは身勝手な自己主張を一切しないという(“tongue-tied”)従順のならわしによって身勝手な勢力に組み込まれた善意に訴える。幼

によって傍証されつつ再会の喜びに流れ込んだものなのだ。

この美しい楽園の際立った特徴は、住人が少年二人きりということ、及び、楽園を楽園たらしめるものが互いに呼び合い応え合う関係だということである。だから

my fears, of what may chance  
Or breed upon our absence (1.2.11-12)

によって突如崩れ去る宴の場が

Nine changes of the watery star hath been  
The shepherd's note since we have left our throne  
Without a burden. (1-3)

で始まるのは暗示的である。すなわち「何の煩いもなく」9ヶ月を自分達だけのために過した王の一人が“my fears”, “my affairs (23)”に引き戻された時、彼が想起した国には羊飼いがいるという事実は、この時になっても彼の受けた歓待を個人的友人への“thanks”(4)で充すことが唯一の義務であると信じている意識と、対照をなすからである。この場の騒動が、滞在を一週間のばすかどうかという卑小な問題を軸にしているという笑劇的性格は、支配者達の被支配者への共感と感謝の欠如を伴って、深刻な倫理的展望の中におかれる。また、「9ヶ月」という指定は、王妃がやがて生む娘に嫌疑をかけるために必要なだけではない。“twin”(67)や“my brother”(4)はこれが母の胎内であること、今や、未だ幼児である王達が“opposed winds”の中に生み落され、互いに生きて行かねばならないことを暗示する。だが

We'll part the time between's then. (18)

とか

There is no tongue that moves, none, none i' the world,  
So soon as yours could win me. (20-21)

とかは、「時間」と「世界」を前にして未だ胎内の論理を用いているために、顔をそむけたくなるような身勝手を生み出している。

ボヘミア王は、突如帰国を言い出す代りに、常日頃国民への関心を友と語ろ

女の恋情が彼女自身にもどうも出来ないものであることを理解する、という最も基本的な共感の倫理——愛——を無視して成り立つ。このことを明らかにするためのシェイクスピアの不変の技法は、王妃の心変りを単に憤るという行為によって、レオンティーズ自身に自らどうにも出来ない不正を実行させることなのである。その時、支配権という公的機能が私的所有であることの非が一挙に吹き出す。だがその非を吹き出させるのは、傍らの王子マーミリアスの可愛い存在の中にこれまでの王妃の存在の有難さを認めてそれに感謝し続けるという視点の不在なのだ。信頼から不信への転回なのだ。

その不在、その転回は、言う迄もなく人が常に身邊にふとのぞく不安、自分が何物でも無いという不安の逆上的な表現なのだが、この不安を虚偽と思い込もうとするので、それを超越するのに力を貸してくれる人々が彼にとって恩恵として存在するのが見えない。エデンの東にあって楽園の特権を主張し続ける者は、不安を超越するための自分自身の役割をも見失うのである。それは人間の条件への不信に他ならないからである。

すでにこのことは、錯覚に至る直前の対話の分析の中で暗示した。しかしこの場はその最初から、この不信で固められた体制の中で人間が涯しない愛の自然な欲求に歪んだ表現を与える有様を描き出しているのである。

#### (五)

この場は楽園に“fears”が忍び込むところから始まる。王達の宴の精神はポリクセニーズの次の言葉で描き尽される。

Two lads that thought there was no more behind  
But such a day to-morrow as to-day,  
And to be boy eternal. (63-65)

twinn'd lambs that did frisk i' the sun,  
And bleat the one at the other: what we changed  
Was innocence for innocence. (67-69)

これは

they have seemed to be together, though absent,  
shook hands, as over a vast, and embraced, as it were,  
from the ends of opposed winds. (1.1.31-34)

相惹くことで生命を全うしていく個体は個に見えて個では無い。個であり続ける限り不毛なのだ。そして不毛とはそのまま死なのである。人は皆性的連帯の中でのみ安んじ得る。夫婦も親子も兄弟も、いや人間集団全体が性という自我に属している。ハーマイオニを喪ったと思ったレオンティーズが、他の何物にもまして先ず確めようとしたのはマーミリアスとの父子関係であることに注意しよう。そして、シェイクスピアの幾つかの重要な状況において親子関係が他のあらゆる公的な考慮を押しつけて強調されるのを思い起そう。親から受け継いだ生命を無事に子供に渡して死ねないならば、きっとどこかが狂っているのだ。これがシェイクスピアの主張である。生命そのものは、殺す以外人にはどうも出来ない。恋する心に計算が無いのはそのためだ。生きることは生かすことなのだ。

不安という涯しなく見定め難いものの中にしつらえられた生命という舞台、シェイクスピアの演劇の背後にある思想をそのように表現出来るだろうか。ここでは、愛と闘争が涯しなく続くのだが、個人々々の願いは只一つ自己を充足することなのだ。客観的には、すなわち観客席から見れば、共通の自己充足の欲求であるものが、主観的には、すなわち人物個々の動機から言えば、“malice”になり変ることが、この作者がその華麗な芸によって繰り返し繰り返し描いたしがない人間劇だった。彼は愛と闘争という二つの原理を認める事を拒んだ。闘争とは愛の不幸な発現であり、自己破壊的な発現であると、彼の全ての作品は訴え続ける。だが同時に彼は、愛と闘争が共に信すべき二つの原理として人々に見える必然的な原因を描き出す。自分の“honest method” (*Hamlet*, 2.2. 465) についてこの作者がひそかに抱いたであろう自負から言えば、その原因とは、演劇的認識力の余りの欠如だった。

若しあらゆる立場の人物像が俳優の肉体と感受性を借りて尤もらしく描き出し得るならば、それはすべての立場が偶然の装いであり、人は皆等質の可能体だからなのだ。演劇的認識の最も肝心な目標は、復讐としての裁きが迷いに過ぎないことの自覚なのだ。復讐とは、誰にも所有出来ないものを、自分の所有と思い込み、その結果、他人がそれを自由に行っているかのように思い込むことなのであるから。

このことを暗示するシェイクスピアの様々な状況の中で一番判り易いのは、配偶者の不貞という状況である。仮に幻想にせよレオンティーズが妻の不貞を信じた時、彼の理性は妻を殺し友を殺し嬰兒を殺すことを認めた。アンティゴナスは王妃の貞節に確信が持てなくなった時、王の処置を正当と考える。ここに見られる正義の秩序は、王妃のこれまで果して来た役割と努力に照して、彼

姿を発見したのは！

my heart dances;

But not for joy, not joy. (110-111)

これは真卒な体験であり、真剣な感情である。その真剣さは、彼の昔の恋の真剣さの投影である。若し彼の求愛にいささかでも演技の感覚があったならば、いささかでも誘惑者の意識、動機と仕草との間のすき間の意識が、あったならば、彼は今ボヘミア王の姿に直接あの時の彼の動機を移し植えたりはしなかっただろう。それは演技ではなかったのだ。そして彼の脳裏に焼きついたあの折のハーマイオニの目差しが、今、ポリクセニーズを見つめている彼女の眼と重なった。彼女の意図は疑う余地が無かった。

自分とハーマイオニとが交し合った心を友人と妻とに読み取った時、レオンティーズは自分自身の存在を無視している。これは所有に安んじた支配者としては奇妙に見えるであろう。だが事実は反対なのだ。所有意識の裏側は涯しない不安ばかりなのである。何故なら、共同生活の連帯の意識と責任感の欠けたところでは、安心は単に与えられたものに過ぎず、日々の協力の歴史が信頼の文脈を築くことが無い。成長しなかった夫婦関係は、少くともレオンティーズにとってのそれは、常に恋人が彼に初めて手を許した時のままなのだ。今再び彼は、彼に一切の既得権の無かった状況に立ち戻る。

#### (四)

これは幻想であって幻想では無い。昔の回想が投影された意味では虚像には相違ない。しかしそれが投影され得たのは虚像を作り出すエネルギーあるからだ。具体的に言えば、シシリア王レオンティーズ、良き妻を持ち王子にも恵まれ、何一つ欠けることなく見えたこの王が、今ここで怖るべき不安を体験しているという事実は、彼の目にそれが隠れていたにせよ、いつも彼の背後に不安があったことを証すのである。もっと別の言い方をすれば、所有する者の支配者的特権に安住していた筈の彼は、只の所有物であった筈のものの喪失に耐えない自分を発見する。特権は彼を支えてはくれないのだ。こうして彼は、特権所有者も只の裸の人間であることを自ら証すのだが、皮肉にも、特権所有者である彼が裸の人間として一人の女の愛に値して来たという事実をも見落すのである。

それを見落すのは、自分を自分個人の所有と信じているからである。他人と



という動詞が “a royal husband” と “a friend” とを同格に従える結果になる。  
考えて見ると、友人を引き止めてくれたのが如何に嬉しかったとは言え

thou never spokest

To better purpose,

(88-89)

というのは心掛けの悪い表現である。自己中心も極まった表現である。王妃が心外の口調で “Never?” と問い返したのは当然だった。心掛けが悪いと言うのは、女の存在理由を断片的な快楽で判断しているからである。彼女の日常の存在が彼の日常の安定にどんな大きな役を果しているかを省みない言葉だからである。女のその存在を以てする貢献に対して同じく男の存在を以て応えるという協力関係の自覚の無い思い上った表現だからである。しかし、男の此の思い上り、乃至は女を所有する者といった意識は、特別にレオンティーズの悪徳ではなくて、ハーマイオニが夫の “praise” (91) を求める表現は結局一つの楯の裏側に過ぎない。「賞めて、賞めて、滅茶苦茶に賞めて」と夫に要求する動機は夫の身勝手な表現への反撥であるにしても、彼女にはそれで夫に腹を立てる積りは全く無くて、此の自己主張によって自分が “tame thing” (92) であることを証している。

you may ride's

With one soft kiss a thousand furlongs ere

With spur we heat an acre. (94-96)

はどうみても “tame thing” の発想であって、それは夫が賞めてくれた範囲で十分に喜ぶ従順な善意なのである。ここには男女の表現法の中に深く刻み込まれた支配被支配の構造があって、それは男と女の自然的な違いに必ずしも帰すことの出来ない構造であり、その意味で tame な者の善意によって最も痛烈に批評されていることになるのである。

だから、“I have spoke to the purpose twice.” という能動表現は、ハーマイオニの日常生活上の立場に不調和だったのであり、レオンティーズの中で、ボヘミア王の帰国意志の撤回の不可解さと結びつく理由があった。

しかもその時、レオンティーズは求愛する者の感じる死にも等しい不安が一拳に拭い去られたあの感動を、今や何の不安もない王者の安心の中で思い出していた。その時だったのだ、彼が眼の前に彼と恋人との見紛うことの出来ない

同じ迷妄に陥った。レオンティーズが妻を不倫と見做すのは、レオンティーズを嫉妬深いと見做すのと全く同じ位自然なことなのである。これは相互に鏡をなしている。しかし情報を多量に与えられている観客の方が責を負わねばなるまい。王妃もボヘミア王も全く演技している積りは無かったし、シシリア王も演技を疑うには余りに登場人物過ぎた。

(三)

色々と遡って考えるべきことがあるにしても、この場の錯覚のいわば機械仕掛けだけは、以上述べた配慮さえすれば、おおよそ見当はつく。

*Leon.*

## Why, that was when

Three crabbed months had sour'd themselves to death,  
Ere I could make thee open thy white hand  
And clap thyself my love: then didst thou utter  
'I am yours for ever.'

*Her.*

'Tis grace indeed.

Why, lo you now, I have spoke to the purpose twice:  
The one for ever earn'd a royal husband;  
The other for some while a friend.

*Leon.*

**Too hot, too hot!**

(1.2.101-108)

王妃が“twice”と言うのは夫が指定した二つの事柄について、夫をそれ程に喜ばす事が出来たのを喜んでいるのである。だから夫婦は同一の二つの出来事について語っているのだ。それだけでなく、彼女が彼に初めて愛の心を示した折の夫の感動の回想に対する“Tis grace indeed.”はその感動が間違いなく彼女自身のものであったことをも物語っている。だが両者の意識は違うのである。そして論理は反対なのである。レオンティーズは恋人を得るに至るまでの彼の求愛と、恋人を得た時の彼の喜悦とを語っており、ハーマイオニは、夫の喜びが自分の喜びであるという前提の上で、夫の愛と客人の好意を勝ち得た彼女のかかわりを語っている。“I am yours for ever.”はレオンティーズにとっては所有の保証であり、ハーマイオニにとっては結合の意志なのだ。そこで、夫が勝手にも只の二度だけについて妻を賞めたのを彼女が従順に喜んだところから、“to the purpose”の主人公が入れ代る。文法上そうなる。そして“earn”

妻と友人をめぐる不可解な出来事が存在が先ず必要なのである。それが “At my request he would not.” (87) であるのは疑い無い。レオンティーズの喜びは彼が友人の翻意を半ば断念していたのを示している。予想しない結果でもあったのだ。彼の願望から見れば恵みとも言うべきこの事態は、しかし彼の予想に働いた限りでの論理では説明出来なかったのだ。彼はその報せを妻の説得力に帰して賞めたが、ボヘミア王の心変りの理由をさてあらためて考えて見ると、あの頑強な帰国の意志とその理由として挙げられた “fears” (11) や “my affairs” (23) が撤回されたのは確かに奇怪なことだった。言う迄も無いが、どのようなレトリックによって、又そのレトリックを使う女に対するどのような突嗟の反応によって、ポリクセニーズがハーマイオニの “guest” (50) となったか、レオンティーズは知らない。夫の為に努力した妻は、夫を喜ばすであろう結果だけを伝えたのだ。

帰る必要と未練を残す心の矛盾の中で友が帰りを急いだ時、未練を代弁することになったシシリア王にも、事の本来的帰趨は判っていた。強いて引き止めるのも怪しからぬことだったから、レオンティーズは自分で説得するのは断念して、未練を妻に手渡したのだ。未練が妻の努力でかなえられた時、自分の未練を当初から批判していた心の部分は満足しなかったのである。その視点からは、王妃と客とが共同して作り上げた事態は論理的倫理的に不純だった。王妃と客とが彼の知らぬところで行ったこの共同作業の不純さは、レオンティーズの眼前で展開されている両名の所作によって完璧に絵解きされていたのだった！ そこには明らかに恋し合う者の姿があった。

「明らかに」とはレオンティーズの判断である。我々は当人達の動機や会話の内容を知っている所以他の判断をてんから拒否して狂気扱いする。だが、動機と行動の関係を知っているというのは行動者当人と観客だけの特権であることをあらためて確認しておこうでは無いか。それは観客席だけに許された視界であって、劇場を一步出れば我々としてあやふやな物の姿の隠れた背後に見えぬ眼をこらさねばならない。観客席の特権を用いて誤解を指摘することは必要だが、その特権を忘れて人物の認識の方法に徒らに感心しても嘲っても自ら演劇認識の方法を捨てることになるのである。レオンティーズは形から判断したのだ。動機が何れ行動になる以上、動機についての疑問は形で解決され得るだろう。すなわち、動機と行動との関係は知っているぞ、と観客席の特権所有者に似た認識をしたのが、レオンティーズだった。しかしそれならば、彼は、その動機と表現は演技なのだ、妻と友人とは俳優なのだ、と考えて見るべきだった。それをしなかったから、彼は、自分の判断を絶対の特権と速断した観客と

クトルの交叉する場としてとらえる特別の興味を任され得ることになる。

以上、述べてしまえば他愛の無い認識の原則を述べ立てたのは、我々がおかしたかも知れない見落しをことさらに重大めかすためではなくて、まさに信と不信とを区別する人間の基本的価値観が機能不全に陥っている人間状況がシェイクスピアの主題だからであり、彼の演劇はこの認識構造の鏡として組み立てられているからである。

ボヘミア王が回想する友情の神聖なまでの深さは、“twinn'd lambs” (1.2.67) の片われであるシシリア王とて同じだろう。そしてまた、彼の求婚をハーマイオニが受け容れた時の彼の喜悦の回想を聞けば、此の男が徹底的にナイーブで育ちの良い王様だと知れるではないか。この隠し立ての無い正直さがあるからこそ、彼が突如裏切りを発見した時の状況と、それが彼の心の鏡にどのような虚像を結ぶに至ったかを、彼のために見付け出すことが必要なのだ。人間を信じるなら徹底しなくてはならない。それがシェイクスピアの技法の思想である。

レオンティーズは馬鹿でも狂気でも無い。宮廷の主宰者として、妻の夫として、客の友として接待者として、彼が王妃の行動を理解しないことはあり得ない。言い換えれば、妻の言動と友人の言動を彼等の心に立ち入って納得しつつ迎えるならば、決して彼等を不倫の仲だなどと考えはしなかつただろう。しかし、一旦彼が錯覚をおかした時点から見ると、彼には二つの根拠があって、互いに証拠となり合っているのである。

状況から切り離された一断面は黙劇同然一つも明確な意味をなさないし、限らない解釈をも許す。妻が友人と手を取り合っているのを見て夫が微笑んでいるのは、無感動だからでも関心がないからでもなくて、黙劇的形象の含み得るあらゆる意味の可能性の中から微笑ましい意味を択ぶための現実生活の文脈があるからである。だから宮廷風の男女の社交儀礼に自らも属しているシシリア王が、只それだけのことで妻を疑うことはあり得ないのである。従ってまた、妻を疑うことはあり得ないような場面が幾つ続いても、やはり疑うことはあり得ない。疑いが起るためには、王妃が従っている行動規範をその規範とは別の立場から眺めるという主観的状况が必要であり、しかもその主観的状况で眺められた王妃の行動形態には疑いを喚ぶのに十分な性質が備っていないとはならない。それでも、一瞬の後に彼は愚かな一瞬の幻想に自ら驚きつつ目醒めるだろう。安定した日常生活が只の幻想で崩れることはあり得ないのだ。だが、彼の疑いが起った時にある不可解な出来事が想起され、その疑いによってそれを説明出来るならば、彼は論理的知性の導くところに従う他は無いであろう。他にどう出来るだろうか？

切り者と考えるのは何が何でも話が逆だからである。それにまた、ハーマイオニを中心とする友好の言葉のやりとり、ボヘミア王に意志を翻えさせてしまう女主人の機智あるレトリックの面白さ、幼年の友情を回想するポリクセニーズの真卒さ、友の滞在延長を知ったシシリア王の強い喜び、妻を賞める言葉、そして夫妻が最初に心許し合った時の感動そのどれをとっても、疑惑・不信・怒り・失意・復讐とは全く不調和だからである。要するに、三人の人物達それぞれがこの場の始めから一貫して示している友好の情と善意からは憤激も不信も出て来る筈は無いからである。

しかし、そこに認識の落とし穴がある。「三人の人物達それぞれがこの場の始めから一貫して示している善意」というのは、この場に立ち合っている積りの我々の総合的判断であり、各人物の、動機、逡巡、考量、行動規範、決断、表現規範を含んだ心的活動の詳細を全て省いて単純化した展望である。この単純化が無意味だということではない。眼前の場面が、友好と善意の動機によって解釈さるべきなのか、情疑と復讐心に即して理解さるべきなのか、の判断は認識の中でも最も基本的な直観的レベルのものであり、それによって我々は心を許してその後の人物の行動を善意の動機のものとして解釈するか、警戒してその後の行動の裏に害意が潜みはしないか探るかを、決定するのである。上述の場合も、我々は人物達の友愛と善意にほだされて彼等に心を許し、彼等の行動を専ら三者が結んで作る友愛の空間の中で把握している。そして一般的に言えば、この方法は充分に機能するのであり、機能しなくては困るのだ。だから、警戒をことさらに解かせておいて裏切る人間に対しては予防の方法が無くて、最も悪辣な罪とされるのである。けれども、この論法は一つの仮定の上に成立しており、その仮定はことさらに問題にされると深い不安を喚び起さずにはおかない不明確なものなのである。その仮定とは、互いに善意を信じ合う者同志はこの友好の事実について同一の認識を持っている筈だという前提である。

我々は此の場の三人の人物の関係について我々自身の判断を下すと同時に、その判断は彼等それぞれによって当然分け持たれている筈だと考えている。それが友好の人間関係に接する時の我々の不信を解除した安堵状態の自然であるのだが、我々が一つの単純な結論からそれに先行した全ての心理過程を単純に意味付けるという循環論法に陥っているのにも間違いは無い。これは神ならぬ身の眼力の限界であり、仕方ないことであるけれども、思いがけない認識の齟齬が全く見付かることなく隠れ得る理由でもあるのだ。三人の人物にそれぞれの意識の世界があるとすれば、第四人目の目撃者である我々は、彼等の誰もが自分の眼力を信じて安心して作っている友好の空間を、少なくとも三つのヴェ

て、支配権の規範的性質から見てこれは危険なことなのである。

世襲される権力が王に息子があるかないかに支配されるという皮肉な事実は、このような私的所有の意識からは隠れている生命の基本構造の優先性を啓示している。人が親から生れ子を生むという定めの中では、何人にも特権はあり得ない。人間は個人の思惑を越えた流れの中に存在する。従って、子供が子供らしく持つ可能性と、子供の子供らしさを拒否して課される未来像とは、生と死ぐらいに違うのである。父王の支配者的感覚を共有すると信じられたマーマリアスの死がこれをやがて実証する。父の悲みは、所有体制的思考の欠陥を啓示すると共に、この悲しみからの脱出こそが体制への強い信頼の目的であるという基本的事実を暗示し、自己破壊的な信念の悲劇性が示される。

現在の王達の友好は友情の重要さを物語って余りあり、幼少の王達の偶然の結合の重大な意味を啓示する。“loves”は“separation of their society”を克服している。しかし王権の割拠的性格の下では separation が規範であって love は恣意的な私情である。“malice or matter”が存在しないところで廷臣達が抱えている不安は、“great difference”や“opposed winds”の対立的性格なのだ。

この事情を王達の成長過程から眺めれば、“gallant”という規範感覚が、王の欲求に表現を与えつつ、その表現を歪ませる様子としてあらわされる。言うまでもなく闘争心と愛欲とを二律的に含む“gallant”なる観念は、以上述べたところにより、愛の自然な優先性を割拠的主張の慣わしと結合している。此の原理上の矛盾を巧みに覆い隠す生活の芸こそが“gallant”なのである。様式化され習慣化され演技される芸があって始めて“a gallant child”が存在する。この芸の巧みな慣わしの中で、それが元来どのような原理的矛盾を覆うための意識の操作であったのか、子供達は知らずに育つ。成長した彼等の間で、ある事実について双方の芸が偶々一致する場合は良い。若し一方が gallant な愛の原則に従い、同時に他方が同じく gallant な割拠的自己主張を行う時、両者は各々の用いる言葉の歴史的な重層性を理解することによって、互いに相手の中に自分の似姿を認識することが出来るであろうか？

## (二)

一幕二場の際立った事件は勿論レオンティーズの不可解な思い込みである。「不可解な」と言うのは、王妃ハーマイオニにもボヘミア王ポリクセニーズにも不倫な恋に類する心は微塵も無かったばかりでなく、王妃は夫レオンティーズの願いをかなえようと客を引き止め、客の方もその熱心に折れて暫く又シシリアの宮廷に厄介になることになった、まさにその瞬間に、夫が妻と友人を裏

人的人格である自由を奪うという事実である。“physic”と“fresh”が、“young”のみが発揮し得る価値，“old hearts”が忘れかけた価値、の独自の存在をあらわしているにもかかわらず、それは“a gallant child”という奇妙な折衷像を介して“the greatest promise” (39) につながってしまう。子供が子供として持つ未来への純粋な可能性は、王の息子が生れによって備えている「最高支配者となる約束」に支配されてしまうのである。

このことは、カミロが王の dignities と necessities に込める重々しさにもかかわらず、necessities が先ず友情の結合を「引き裂いた」ものとして表わされ、dignities がその友情の私的表現の支配者的壮大さに代表されるという事実と一体であり、しかもこの自己矛盾した生活習慣を誰も疑ってはいないのである。王子に託された非実体的な期待と王の生活の私的様相とは、実は同じことの両面であると共に、支配者と被支配者の間の欲求の分裂を物語る。そしてそれは支配者と被支配者それぞれにおける欲求と現実との分裂を物語るのである。

体制に依って生きる集団が体制を維持する必要に支配されていることを端的に示すのは、此の場の結びの二行である。

If the king had no son, they would desire to live on crutches till he had one. (49-50)

互いに良い王子を持つ安心を背に、廷臣達は、老いても生への限りない執着を見せる老人を、微笑を含んでからかうのだが、この言葉は、やがてシシリアを襲う体制的不安を予表していることから判るように、この文化の真実を映している。この文章の文脈においては、王も王子も臣下達も誰一人個人としての意味も価値も持たない。彼等は歯車であり、必要物である。王子は体制のために生れなくてはならない。王は体制のための性的媒体の仕事を果さなくてはならない。そして臣下の全ての努力は一人の嬰兒が生れるかどうかにかかっているのである。

生れ、生き、死ぬという自然の掟の中で、人生の終りに臨んで最も基本的な必要が、死の定めを拒んで人が生れるのを願うことだとは皮肉であって、集団の体制が全く相互扶助の役に立っていないのを示している。尤もこれは勿論被支配者がその立場において最も言うべき儀礼的な言葉を用いた文脈なのであって、王も王子も、そしてこのように談笑している廷臣達もこの文脈に現われない生活を生きているのである。しかし文化の意味を支配権の世襲制度に代表させてしまう体制規範が生活の現実態を有効に代表していないのは明らかであっ

物質的執着を否定する文脈の中にあっても、over-kind は、若しこの王達の友好が存在しなかったならば、当事者の意識を占めていたであろう物質的関心を代表する。それは経済的行動には物質的制約があること、及び、与える側は相手の資格に応じて与えることを物語る。従って「freely に与える」という美德が無条件に掲げられ得るのは、経済的破綻を心配せずに済むという条件の下で特定の資格を持つ個人が招じ入れられた場合に過ぎない。果然カミロは、支出の尤もな理由として王達の幼時からの友情に触れる。しかし客観的に眺めれば、この友情は私的な事情に過ぎず、王達の再会を含めてそれに至るまでの友情は、支配者に許された便宜を最大限に用いて表現されて来たのだ。“magnificence”は最高の愛の徳を掲げながら、支配権力の私的性格と結びついて、愛とは本質的に対立する様相を持っている。

このようにして、自己を超えて拡大する愛が、自己中心的な表現形式に閉されている状況が暗示されるのであるが、それは24行目 “They were trained together ....” 以下の王と王子についての言及によって具体的に描かれている。前半で王について後半で王子について語る二部構造は、この文化の抱える矛盾を意識しないでおく為の意識の二重の操作を写し出すように巧みに仕組まれている。両部分は共に、幼年の王位継承権者の成長についての廷臣の意識を、王子が成人した時点と、幼年の時点で示す。両部分間で際立つ違いは、王については、支配者という条件の下で主張される個人的欲求が主題であり、王子については、成人時の支配者としての可能性に対する被支配者の欲求が主題だということだ。

子供である王子への涯しない期待は、期待する廷臣の肉体条件を上回り、子供の年齢条件をも上回るが、この期待は、現王の少年時代の「訓練」の目標だった筈の “more mature dignities and royal necessities” (27-28) に対応する。現王に託された期待は、これまでの治世の無事によって実現されて来たのであるが、二人の王の私的な友情によって偶々理想的にかなえられているという事実は覆えない。従臣達の賞讃と祈りの背後には、現状への信頼の寄せ難さという無意識の体験的反応があり、年端も行かぬ子供へ王家の強力な支配力の願望が託されるという幻想的状况を伴っているのである。

You have an unspeakable comfort of your young prince. (37-38)

異国の人の好意ある言葉は、それが好意に充ちているだけに、無条件に承認された王権の自己中心性を浮き彫りにする。問題はこの自己中心性が王子から個



王家の未来を期待する此の会話は、その平和な祝賀の気分によって来るべき混乱と対照をなすが、それだけでなく、来るべき騒動の背景である宮廷文化を展望する呈示部なのである。

王達の友好を破壊する原因は考えられないと従臣達は現状を分析する。

I think there is not in the world either malice or matter to alter it.  
(1.1. 36-37)

(以下引用は The Globe Edition 1956年版による。)

結果的に彼等は甘かったわけだが、強ち間違っていたのでもない。自分の支配者には不安が無いと信じて、“the world”を外的因子の意味に用いたのが甘かった。現実には、此の信頼の対象である王が、私的感情を「世界」への責任に優先させて混乱を起す。王における支配者の責任の自覚の稀薄さは、この体制全体、少くとも宮廷文化に、自己が構造的に抱える危険の認識が無いのを示す。

この短い場が芝居全体への展望となるのは、言葉一つ一つが互いを照し合いつつ有機的全体構造をなしているからであるが、本当に綿密に分析すれば限らない循環的な説明を繰り返すことになる。一定の視点からは只の同一原理の様々なレベルでの投影であるものを逆の方向から論証するのは、構造の証明としては必要な手続きだろうが、小論の規模を考えた場合、綿密な論証は次の場の錯覚について行うことにしないと都合が悪い。それに、我々の内にある特定の関心との関連さえ納得すれば、あとは作品の言葉の方が有無を言わず痛快に引つ張って行ってくれる。それを頼りに、概略の観念化を試みよう。

ここでは華かに友情の宴を張る王達に直属する賄方とも言うべき廷臣達の生活意識と、その抱える自己矛盾が示される。先ず“great difference”(4)に始まる物質的感覚の社交儀礼における重要さがある。王達の宴を可能にするのは何か？ 貸借関係の用語を用いて友好が語られるのは何故か？ “magnificence”の前に“loves”が“shame”を感じざるを得ないのはどうしてか？ loveが物質的差別を消し去るのだという双方の主張にもかかわらず，“understanding”と“honesty”は物質的所有の優劣にかかわらず、“give”する力の大きさを賞讃し、その力の起源——富の生産と、生産物の偏った私有——への無関心を示す。この無関心を前提にすれば、若し今偶々成立している友情がなければ、意識は所有の優劣感覚のみに占められるであろう。

Sicilia cannot show himself over-kind to Bohemia. (23-24)

視界が展ける。

どうして我々はこれを見落したのか？ 手短かに言えば我々は「性格」という概念に憑かれて、これを余りにも実体として扱って来たのだろう。情念の主体というロマンチックな人間像にとらわれて来たのだろう。しかし「運命」が「性格」に取り込まれた時、それを取り込むまでに「運命」に挑戦し続けた演劇的集団知性は「性格」を解体する運命を負った。一方に、社会の日常規範に安んじて、情緒異常を煽情的に愛好する傾向が現われ、他方に、人間を欲求と制御の組織と捉えて、自己の欲求への集団的な責任の自覚へ向った者もあった。

認識の閉鎖性は、人物の使う言葉の主観的な意味と、その言葉がそれ自体で含む社会的展望との食い違いに現われる。齟齬の大きさは、言葉を共有していると信じている人々の間の感受性の違い、共感の欠如を反映する。それは、集団内での生活条件の違いを反映する。

言葉の重層性の社会構造をそれと認知するのは、観客の感受性の社会構造でありそれを問題視する意識である。この意味で、観客席は認識の安全地帯では無い。刻々の刺戟に身を委ねて流される代りに、観客自身の心の中の言葉の感覚に照しつつ理解し、人物の主観に密着しようとする彼自身の観念連合の体系を修正する。「物語り」は我々の社会的自我の中に先在するのだ。我々はそれを信じ、同時に精密化を心掛ける。

認識力への此の挑戦が果して大衆劇場において妥当なのか、いやそもそも何故必要だったのかをここで論じる用意は無い。「欺し絵」と同系列の謎解きだったかも知れない。マナーリズムと呼ばれる文化現象との関連を考えるべきかも知れない。しかし直接には、時の権力の怖るべき検閲の追求を逃れるためであっただろう<sup>3)</sup>。社会の集団的迷妄についての洞察は政治的にならざるを得ないからであり、発想の順序は先ず体制への関心だったであろうから。権力体制に従った大衆作家という印象を美事に与えて来たこの作者の無言の技法を当時の観客がどれだけ理解し得たか疑わしいにせよ、検閲をくぐらねばならなかった知性は、屈服を、稀にみる華麗な演劇的復讐、いや、検閲する権力を信じる支配者の中で窒息する支配者自身の人間性の、同情を込めた描写、に転化したのである。

## 本 論

### (一)

「冬の物語り」はシシリア王の従臣カミロとボヘミア王の従臣アーキダマスの対話から成る短い場で始まる。王達の友情の深さを讃え、その永続を願い、

他ならないのだから。冬も春も明確な因果によって運ばれる神秘なのである。

以上、病的嫉妬の説は、錯覚自体の状況にも一致せず、作品の主調にも反している。嫉妬として片付けた結果、錯覚の因果をテキストの中で追いつめる努力が阻害されたかも知れない。知的不審と幻想化との均衡のドラマが批評の側で行われているだけだという怖れは充分にある。若しレオンティーズの錯覚が、この鷹揚で多感な、友を愛し妻を愛する若い王の中に、まさにそれらの性質ゆえに起ったことが認められるならば、作品全体への展望もずっと違って来るだろう。

シェイクスピアの重要人物達が折々示すあの場違いの激情は、果して異常な情念の狂気というレベルで、我々の困惑を無視してまで、解釈さるべきなのだろうか？ というのは、そのレベルでは、どれほど精妙な心理的説明が行われようと、知性を忘れた愚劣さは解消しないのであるから。

シェイクスピアの作品を全部分析したわけではないが、四大悲劇を含めて幾つかの作品には、悲劇も喜劇も通じて、これ迄見落されて来たと言う他ない明確な発想と堅固な構造がある。「物語り」と「性格付け」との間には、開幕が終幕を含むという意味で、厳密な因果の仕掛けがある。これは、この作者の作風がサスペンシ的で無いという指摘などで感覚的に捉えられて来たものであるが、基本構造は隠れたままだった。それは隠されているからである。というより誰も我々の為に絵解きをしてくれる人物が居ないからである。

観客は純粹に現象だけを見る。各人物の想念と言葉と行動を。人物達もまた相互に純粹に現象だけを見ている。そういう状況を仮定して、さて、人物達が自他の行動の現象をそれぞれ認識する有様を観客が認識する時に何が起るか？ 協力関係にある人物達は何か思いがけない衝突によって認識の食い違いを露呈するが、その衝突をそれぞれの認識によって判断するだろう。その中のある人物の誠意が観客に直接伝えられる時、観客は、その誠意の論理こそ全ての対立者を各自の認識に閉じこもらせている正当な理由なのだ、と気付くかどうか？ 観客自身の認識の偏りに閉じこもらずに眼を開いていられるかどうか？

シェイクスピアの悲劇的状況は、自己の認識力についての自己認識の相互の欠如によって起る相互不信という集团的自己破壊状況である。個人の責任が日常的な選択の是非について問われ得るような範囲のことではない。人物達の日常生活の知恵は事件を終らせはするけれども、事件の真の原因を誰も知らない。事件の経過についてある特定の寓意的関心を刺戟される場合だけ、透明な

原因があっても、作品の幻想的な調子は保たれる。理屈を言えば、幻想的だからといって訳の判らぬことが起って良いということにはならない。

ところが此れは単なる小理屈ではない。此の作品の幻想性は不合理とか不条理とかとは縁が遠いのである。たとえば、嵐の海辺、熊の出没する場所で、使者も船も滅びた時、置き去りにされた赤ん坊が助かる場面がある。成程一見お伽話めいてはいる。しかし、人間の生命などに何の関心も示さない苛烈な自然の中に、美しく優しいものの種があり、それを見捨てておけない人情がある。でなければ金品を奪って見知らぬ嬰兒を捨てれば良かったのだ。反対に、嵐の中に舟を出して死んだ人々の背後には、嬰兒を殺す意志、死よりも恐ろしい、拒否出来ない意志がある。それでも、王を懸命に宥めた者の人間性と、その場で殺さなかった暴君の人間性と、助かった時の用意を添えて嬰兒をせめて陸地まで運んだ者の人間性が、他国の羊飼いの人間性につながって、折角生れた幼い者が生き延びる。自然を人間にとって必要以上に猛々しいものにする因子と、それを人間の住みかにする因子と、それが冬と春の分れ目なのだと、誰に教えられなくても判るではないか。この直観は幻想ではない。一見非現実に見えるものは、日常の末梢に慣れて鮮かさを失った我々の価値感覚に、その本来の働きを典型的に見せ、我々の裡なるものを想起させ、説得する。判り難いものも、不条理なものも一切無い。

それにまた、愛する者を自ら殺した悔いに生涯を捧げる積りのレオンティーズ、そのどこに幻想があるだろうか？ 愛する主体としての自責ゆえに、彼は自分の愛の可能性を再び積極的に実現出来ない。自己否定に至った此の倫理的自覚に対して、作意により錯覚は主人公の責任ではないと言うのは何と筋違いなことか。

しかし、また、レオンティーズの倫理的自覚は、その余りの徹底性ゆえに、かえって伝説化され祭り上げられて幻想に属することになってもあるだろう。専ら罪障感に依存する純粹に精神的な態度は、個人と集団の肉体的現実とその必要に対して偏狭さを示してしまうのだ。彼の態度の思想としての非現実性を、幻想説は批評の外に押しやる。だが、これは不必要なのだ。その非現実的な偏狭さこそ、春の到来によって暖く修正されるのである。作者はぼかしたりせずに、未熟な思想を自ら熟させる。確固とした思想と思いやりが作者の側にある。自分の子供ではないという理由で人を殺そうとした男は、人の思惑を越え個を超えた生命の神秘に包まれている自分を見出す。これを幻想と呼ぶのは自由だが、不合理を容認する作風とは混同さるべきではない。その神秘は、レオンティーズ自身の後悔に始まる関係者の具体的な行為の連鎖の持つ意味に

理の空白を完全に埋め尽すかのように用いられている。しかし、これは、作品の事実及び構造とひどい矛盾を生じていると私は思うのである。

嫉妬と呼ばれるのは、貞節な妻を理由なく疑ったからだと言うのだろうが、レオンティーズによれば理由なく疑ってはいないのである。彼は、これ程明白な事実をありのままに承認する勇気が無いと家臣達を叱りつけているのだ。妻の異性関係に証拠も無く不安を抱くことと、妻が不貞だと信じざるを得ないこととは、天と地程にも違いはしないか？ この二つを区別しないで、たとえば「オセロ」の偉大な戦士とその讒言者とをどう弁別出来るだろうか？ 尤もその意味では、ヴェニスのムーア人将軍も、イアゴの悪徳によってのみ庇われるという非道な讒言を受け通しだったと私は思うのだが、兎に角、妻を信じ愛している人間に彼女を誤解させるのは、所謂嫉妬心の如きものではあり得ないではないか。

勿論、裏切られたと信じた男は性的執着を様々に屈折させて示すだろう。しかしこの様相を嫉妬と呼ぶならば、それは病的でも狂気でもないだけでなく、裏切られた者の執念は最早存在しない権利の主張だという、全く別の事柄の関心を含むのである。

事実は全く嫉妬の逆を示している。各批評者が明言する通り客観的にも原因は無く、当人も嫉妬の危険を十分に自覚した上で理性を最高に発揮したと信じている。

はっきりしているのはシシリア王が形から短絡して結論を出したということだが、その短絡を起したのは嫉妬だと決め込むのは論理的必然性の無い短絡である。

嫉妬説の肝要な点は、非論理的に飛躍した行動を、兎角合理性を欠き勝ちな特定の情念に結びつけたことだ。成程、どんな風にか性的関心がおかしな具合に働いているとは察しのつく事件である。しかし、因果が不明というのと、因果が偏っているのとでは、不合理の性質が違う。嫉妬は追跡可能で、共感も反撥も出来る。仕末は悪いけれども、突発的では無い。若しレオンティーズの誤解を直観的形式に即して嫉妬と呼ぶならば、因果の鎖の不明の部分を探して論理を整え、その不明さこそが仕末の悪さであったと証明すべきだろう。そうすればレオンティーズが彼の結論を全く恥じない理由も説明することになる。

尤も、嫉妬説の持つこのような曖昧さは、同じく一般に言われているこの作品の幻想性・非現実性という認識によってぼかされているであろう。知的な不審が入口で拒否されてしまう。しかし、このシシリア王の錯覚だけについて言えば、幻想的ジャンルによる説明は循環論法である。たとえこの錯覚に確かな

# 「冬の物語り」

——不信の循環——

丸 田 敬

## 前 言

シェイクスピアの作品には、物語りの発端の位置にありながら全く奇妙としか見えない事件が折々起る。ある人物が、その場の空気からは説明のつきかねる破壊的な感情に襲われて、不幸な騒動になる。例えば「リア王」開幕の場で、リア王は今の今まで可愛い娘だと世間に自慢して来た末娘の一寸した反抗、それも彼女の清らかさを証明する一寸した言葉、に憤激して追放同然にフランスにやってしまう。此の人物の心理を状況と対応させつつ精密に分析して、常軌を逸する程の情緒の原因を探る試みは沢山あるけれども、批評者の繊細な感受性の自己投影であることは避けられなくて、リア王の心で起ったことはリア王の心によって推定する外は無いという状況なのである。従って反対に、この部分はお伽話のように承認しておくべきなのだ、非実現性や没論理性は作風そのものの性質なのだという言い方も可能であって、どちらも明快な根拠を持たない。結局のところ、この事件は、それが起す波紋と衝撃によって意味付けられ、物語り全体の因果の流れの中では異質の時間として扱われ、リア王の精神の営みの中では狂気と見做され、その否定的位置付けによってリア王の自己省察の材料とされる他は無いのである。

同じような例に「冬の物語り」一幕二場でシシリア王レオンティーズが妻ハーマイオニと友人ポリクセニーズとが不倫の仲だと突然信じ込む事件がある。困惑してこれを動機のない狂気だと解釈せざるを得なかった点で、批評史上に変化があったとは思えない。E. ダウデンの“hideously grotesque”な“jealous madness”<sup>1)</sup>と「リヴェーサイド版」注釈者の“the insane jealousy, apparently unmotivated, a kind of disease”<sup>2)</sup>との間には特別違いは無いようである。

面白いことだが、この錯覚を不条理としながら、嫉妬だと一致して定義している。不条理という前提からして、嫉妬の心理学は適用不能の筈である。嫉妬の動機は見当らないが、嫉妬の形式には適っているということだろう。ここでも、結果から原因を推定した。しかも、この喚情力のある嫉妬という観念は論